

研究ノート

ハニ族の二つの支系とその文化的差異について

—二つの婚姻体系—

稲村 務*

中国民族学の老大家、費孝通はいわゆるイ語系の民族、イ、ナシ、リス、ペー、ハニ族の民族識別についてはもう一度、検討しなおす必要があると述べている。ここでの「民族」という概念範疇と西欧の人類学が考える'Ethnic Group'との間には大きな隔りがある。1953年の第一回全国人口調査で後のスターリンの定義による民族識別がなされるまえに自己申告によって登録された民族は400以上にものぼったという。(栗原1989) おそらく、この時点での「民族」は我々意識に基づく'Ethnic Group'に近いものであったろうと考えられる。

雲南省においては12の「民族」が数えられている。この地域は R. Redfield のような Great Tradition が漢文化、インド文化、チベット文化の三極をなし、かつ複雑な地形はこの地域の民族分布と多様性に拍車をかけている。

本論は上述のイ語系の「民族」について(とくにハニ族について、)これもまた中国の発明である「支系」という概念を論じるものである。

Michael Moerman はタイ・ルー族の分類についてエスニシティ論が盛んになる前にすでに疑問を投げ掛けている。民族名は話している文脈によっていい分けられていて、それでいくと同じ人々は複数の民族に属することになってしまうというのである。私が同じルー族の取材をしたとき、漢族に三種類のタイ族が西双版纳に存在することをきいた。いわく「旱傣」(dry-Dai)、「水傣」(water-Dai)、「花腰傣」(flower-belt-Dai)である。そしてこれには Thai noi, Thai Lue, Thai yai をあてている。(傣族簡史1985)しかし、字を見ればわかる

ように「水」「旱」は生態学的な適応の仕方について言っているのであり、「花腰」は服装の事を言っているのである。実際きいてみると、「花腰傣」は「旱傣」でもあり一対一には対応しないものである。さらに Moerman はルー族が Pong と La に分かれることを指摘しており、いよいよルーとはなにかわからなくなる。

このような複雑性は本題のイ語支のハニ族の「支系」にもある。[宋1986]によると「支系」としてあげられているのは11にものぼる。しかし、これらの名称群は、もともとわかれたクランの祖先の名前だったり、ダイ族からつけられた徴税単位の名称であったり、漢族が付けた服装による識別名だったり様々である。

より客観的と思われる言語的分析ではハニ族は大きく三つに分かれる。しかし、語彙や音韻からみてイ族とハニ族の差異はハニ族内部の方言の差異と同等である。Stevan Harrell によればイ語の方言差是北京語と広東語の差異に匹敵するという。ハニ族のなかでも方言差は文字がないうえに余計、激しく状況は似たりよったりである。

[宋1986]によると墨江に住むハニ族(以下、墨江ハニ)西双版纳に住む二つの「支系」(ジョゴエとジェジョ、私が調査したのはジョゴエ、以下二つを一緒にして「版纳ハニ」という)とには婚姻規制において違いがあるという。この違いが生み出す二者の文化的相違について論じたい。

まず、両者に共通する親族体系の特徴は父系リニジ外婚である。ふたつの集団は語りべが語る系譜を文化を様々な局面で規定する拠り所として重視している。これは第一代 Sumio を人の祖とす

*筑波大学大学院地域研究科

る長いものでは80代にも及ぶものである。

これに属することがハニ族の最も重要なアイデンティティである。竹村卓二はこれについて重要な指摘をしているが別の紙面に譲りたい。ハニ族には明代に与えられた「姓」(注1)があり実際、墨江ハニでも版納ハニでも姓集団が外婚単位となっている。(注2)

[宋1986]によると墨江ハニは婚姻規制としてその外、交差イトコ婚を奨励している、版納ハニはそれを逆に禁止していると述べている。交差イトコ婚は内婚的傾向を促進し実際、墨江ハニの同姓村の形成の一因となっていることが考えられる。

版納ハニは理由はわからないがそれを禁止しておりイトコ婚となると平行イトコ婚をせざるをえない。しかも、父系リニジ外婚であるから母方の平行イトコ婚以外にはありえない。母方平行イトコ婚は父権制を保証するが、婚姻の対象を外へと向かわせる外婚的傾向を促進する。仮に、完全に母方イトコ婚が行われたとすると二つのリニジでは一方が女性を出し、一方が婚資を出すという不平等なシステムを作るため、事実上、安定したシステムを形成するには三つのリニジがあるようにするというサブシステムをもうけるないしは、イトコ婚そのものをさけるよりほかない。

イトコ婚をさけるのは版納ハニにとって困難である。ダイ族はハニ族のような山地民との通婚はしない。(秋岡1983)プーラン族はまったくちがう語系に属すためまた事実上困難である。実際、私の知見でも多民族との通婚は漢族以外ない。そして、漢族が本格的にこの地に入ってきたのは新中国成立後である。ならばハニ族同士の村外婚であるが、実際この事例は多い。しかし、村外といってもせいぜい数キロメートル離れた村であり、かなり孤立した小村も存在する。

版納ハニにはそのためのサブシステムとして一つは、一つの村落は3つ以上のリニジをもつでなければ村落を形成してはならないという掟がある。そしてまた、婚姻の際には必ず結婚する二つのリニジ以外の媒酌人を第三のリニジから呼んで

こなくてはならない。そして、その際には三つ目のリニジの成員に食事をさせ当事者のリニジの成員は食べてはいけないことになっている。二つ目にリニジの分裂を容易にしているということがある。(竹村1980)竹村によるとリニジ分裂にはロンドゥグオという儀礼を行いそれによりわけることができる。実際、新村を作る際、他から別のリニジの成員をつれてきたり二つのリニジに分けたりすることは頻繁にあったようである。(哈尼族社会歴史調査1982)

また、以上のことは定住と移動にも反映されている。ハニ族は双子や異常児を忌み嫌いそれによって、あるいは天災などの生態学的要因で簡単に位置をかえてしまう。その際、リニジの成員は変わらないままに動くよりも借りてきたり分裂させたりすることが多い。そして、そのこと自体がよそものを受け入れることによってまた移動させる原因にもなっている。

以上まとめると墨江ハニは静的で閉じたシステムを持っているということが出来る。彼等は漢化が非常に進んでいるが強いアイデンティティを持っているという現状がある。このことが、容易に漢族にはならなかった一因ともいうことが出来る。他方、版納ハニは動的で開いたシステムを持っている。しかし、彼等は不遇にもダイ族の政治機構になかば組み入れられ、そのなかで様々な文化装置を作り自己の民族意識を保ってきた。

新中国成立以来、状況は一変した。Harrellの言葉を借りるなら「民族識別」によって新しい「民族」と「民族意識」は作られたのである。西双版纳のハニ族の老人はいう。「我々はハニ族という言葉は漢語でしか普通使わない。東のハニ族は我々とまったく違うが同じSumioの子孫である。」

もし、ハニ族に共通の特徴があるとすればこの一点より他に私には考えられない。しかし、この原則が「作られた「民族」」の中でひとり歩きしなかったのか、あるいはこの習俗そのものが民国期、明清期にいかにか発生し流行したのか、はたまた実際彼等は同じ祖先の子孫なのか難しい問題が

残るがそれはイ族系の民族、ダイ族との関連性のなかで深められなければならない問題であることは確かである。また、中国の場合、客観的屬性は容易に主観的屬性へと変質しつつあるとよいと思う。

(注1) 姓は実際には版纳ハニの場合名前のうえについているものではなく単に出自をいう文脈でのみ用いられる。

(注2) このいいかたは正確ではない。本来、姓集団は外婚機能を持っていたがその5代以後、7代以後はおなじリニジ内でも結婚してよいことになっており、姓集団とリニジは同一ではないが、かれらの意識レベルでは姓集団が重要になる。(詳細は竹村1980)

参 考 文 献

- 民族問題五種叢書 1982 哈尼族社会歴史調査
雲南民族出版社
- 民族問題五種叢書 1985 傣族簡史 雲南民族出版社
- 民族問題五種叢書 宋恩常編 1986 雲南方志民族民俗資料瑣編 雲南民族出版社
- Michael Moerman 1965 Ethnic identification in a complex civilization : Who are the Lue ?
- Stevan Harrell 1988 Ethnicity and kin terms among two kinds of Yi, Washington Univ.
- 栗原悟 1989 「社会変動のなかの少数民族」 静かな社会変動 岩波講座 現代中国 3 卷
- 秋岡家栄 1983 雲南に生きる人々 三省堂
- 竹村卓二 1980 「アカ族の父子連名制と族外婚」 社会人類学年報
- 費孝通 1988 「関于我国民族的識別問題」 民族研究文集 民族出版社
- 宋恩常 1986 「哈尼族婚俗」 雲南少数民族研究文集 雲南人民出版社
- 曹成章 1984 傣族農奴制和宗教婚姻 中国社会科学出版社

次に1989年7月、中国雲南省西双版纳孟力海県で聞き書きをしたハニ族の民間故事二題を記し、参考に供したい。

〔人類起源歌〕

アイニ族の老人が言うには、古代人は毛のない猿のようなもので、じめじめした暗い岸辺や、草むらの窪地にいた。その後、大地にはいつも野火や山火事があり、彼らは隠れるところがなくなった。そしてやむなく、湖や海へとはいっていった。一日中湖海と天の際を漂っていた。彼らはすべてを水中の小動物をついばむことに頼っていた。彼らの形は、細長で眼は青く、手足は蛙ににていた。当時、彼らはただ泳ぎ這うことしか出来ず、一度も立った事はなかった。このような時期が、一万年過ぎた。その頃火山はいつも爆発し、空は灰で真っ暗で地は燃えたぎっていた。又、山と石はごろごろと転がり落ちていた。海の中に入ったこの人類の萌芽と言うべきものはほとんどが死した。そのなかのなん匹かが半ば死にかけながらもまっくらな天にないていた。三十三ヶ月泣いた後、その泣き声は天上人をびっくりさせた。天を管するジャピアラ（加兵阿朗）は急いでこの人類のもとをすくうため、熱気の大地に風を起した。熱気は吹き飛び、山と石は元通りになった。河海は青くなり、和やかな風が地を掃き、明るい太陽が照るようになった。雨は嬉々としてふり、地面には生気があふれ、万物はさかえた。人類のもとは温かい水の中、ゆっくりと回復してきた。ところが、水の中のいくつかの動物は人類のもとを食べたく思うようになった。人類のもとは大声で叫んだ。天を管するジャピアラはまた一度この声を聞き、いそいで天上から神の瓢箪をおとした。それをツォシェアラという。(人類の萌芽もしめす)そして、みなその瓢箪のなかにはいった。神の瓢箪は開くことも閉じることもできた。彼らは皆ツォシェアラにはいった。蓋が閉じると一点の縫目もなかった。いくつかの動物がその瓢箪をかじろうとしたが、かじり通すことはできなかった。ツォ

シェアラは瓢箪の中でゆらゆらと泳いでいた。神の瓢箪は浮かんでは膨張しました青く光った。それは人類のもとが生長しているからであった。神の瓢箪は海の中で、まるで巨大な岩石のようにぶかぶかうかんんでいた。他の動物は河の砂州のうえで太陽にあたりながらジージーとジャピアラをよんでいた。ジャピアラは瓢箪がこんなにも大きくなったのを見て大急ぎで瓢箪に命令した。

「おまえが下界におりてからすでに九百九十九日たった。もう口をあけて、人類のもとを外に出すべきだろう。そうでないと彼らのおびたしい生長の影響を推し量ることが出来ない。」

神の瓢箪には非常に厚くなった泥が染み着いていた。それで、中の人類のもとが息ができなくて死ぬ危険がでてきた。ジャピアラはこのことを知ると、急いで一群のネズミを遣わし、九十九ヶ月かけて固まった泥をかみ開き、青水で押し流した。神の瓢箪は息をする機会を得ると自分で草地の岸へ流れより、口を開いた。人類のもととは一つ一つ流れでてきた。このころの人類のもととはもともと赤い色ではなくなっていた。そのうえ、頭から尻尾まで黒い毛がのびていた。彼らはもうふたたび河海にはいることはなくなり、草地の生活を好んだ。そして神の瓢箪の半分を住む部屋に当て又半分をベットにしてねた。彼らは山の清水を飲み竹林の軟らかい草を食べていた。このような日々が三百三十三年過ぎ、野火が山を焼き大地に広がった。人類のもとたちは一筋一筋下ってくる火煙をみて、あるものは木彫りの鶏のようにおびえ、あるものは驚いてほら穴へと逃げいった。いまでも、人類のもととは走っても逃れることが出来ず、隠れても隠れきることが出来ず、もうもうたる烈火はまる百年もえつづけた。あらゆる山と水が灰と変し、それには飛ぶ鳥もなかった。神の瓢箪は人類のもととの死活どころではなくただ天上にもどって危険を避けていた。天を管するジャピアラはこの情景を見てたいところをいため万物の種の母であるサンシサンヤに一つ一つ種を撒かせた。そして、雨がまる百年降った後、大地には河がながれ、高山は装いを新しくした。百獣が地にあふれ

花が開き、鳥がさえずり、人類のもととは四方八方から集まってきた。そして、ジージーチャーチャーと互いに自分の難儀を語り合い、ジージーシーと新天新地を祝った。このころの人類のもととは体毛は十センチぐらいになり、髪の毛はすでに一丈ほどになっていて、寂しい地上をはっていた。

ある日、木の上で遊んでいる一群の猿（烽猴）たちが人類のもとを見て、

「おまえたち、木の上にごないか、地上は安心して生活できないぞ」

という。しかし、人類のもととは近づくこともできなかった。なぜなら、猿が身につけている火がとても恐かったからである。とはいっても、動物の中で彼らは人類のもとにだけ眼を付けたのだ。それは、人類のもとが尾がいくらか短いこと以外は、容貌が似ているからである。猿は、人類のもとが這うだけで立てず食べ物を捜し当てられないことを知っていたいそうかわいそうに思った。それで猿はからだの火を始末して、人類のもととの近くへ行き相談のうえ友達になった。それからというものは人類のもととはみな猿の乳を飲みそして母猿について木を登り、ただ年をとれば死ぬというようになった。彼らは従来の生活様式から完全に脱したのである。そして、猿と一緒に、この山からあの山へ、またあの山からこの山へと移って行くようになった。ある時、山火事があって地上ではたくさん動物が焼け死ぬということがあった。木の上ではいいにおいが漂ってきた。人類のもとはこのにおいにたいへん興味を覚え、地上に降りて拾って食べてみた。母猿は下へ降りるとまたひどいめにあうと再三警告した。長い時間が過ぎ彼らはまた食べてはうまいと感じた。そうしているうちに、木の上の生活を忘れていった。母猿は人類のもとには一種の特殊性があることを知った。そして更にしつけることはなかった。そして、猿たちをつれて深い山のなかへと行ってしまった。地上で人類のもととは石や木や藤づるを使って杖にして立つことを覚えた。また長い時間が過ぎてだんだん支えも入らなくなり、自分で立てるようになった。ある日、大風が吹いて、大雨が降った時、あるい

はやまが燃え気候が火のように暑いとき、大は小を領する事がわかり、石洞へとはいっていった。それからというものは石洞へとすむようになった。それから又長い時間が過ぎて、人類のものは石洞からでていってものを食べるようになった。ものをとってきては石洞の中に持ってきて、老いたもの幼いものに与える。このころの人類のものはお互いに喋ることができ、泣くこともできるようになっていた。とはいってもこのころは、およそ生のもものばかりを食べていたので？だんだん歯が目立ってきて、髪の毛も段々長く黄色くなってきた。そして又ある日、灰の中に動物が落ちて焼け死んだときそれを食べてみた。彼らは焼けた土や灰が塩に似た味がするのを知った。腹がへって食べるものがないときはこの土灰だけを食べた。また食べ物が見つかった時でもこの土灰をかけて食べた。人類のものはもちろんそう遠くへはいけないのですぐ石洞へ帰るのが常だった。それでかれらはいつも石板の上に寝ていたので尾が短くなった。また、石洞の周りでは自然に瓢箪が生え、ネズミも多く飛び跳ねていた。そしてのちには種？とはときには石、ときには瓢箪ときにはネズミの名をとるようになった。根本的には父親の最後の一字をとる。ハニ族の父子連名は人と神鬼が別れた後、第一代の人スミオをもって始まる。スミオから現在まで八十代、二千年の時間がある。こういった日々が約一千年過ぎた後、人類のものはますます多くなり石洞や樹洞に家をつくっていった。(1989. 7月. 高和氏談)

〔茶葉の由来〕

アイニの山里は最も高いところにあり、いくら眺めてもみつげだせない。村の外の山道は無数にあって、どれが村に通ずるのか誰も知らない。山へ向かってちょっと歩けば、そこは百獣が吠え百鳥がなぐところである。茶について、それがどこからきたのか話すとそれは二つの方面から話さなければならぬ。ひとつはこうである。

遙か一千年前、内地の大都市に住む孔明先生、

年は高齢八十八歳で家の内も外も書物であふれている。夜は静かで、入ってくるものも少ない。ある日の朝食の時分、南方から帰ってきたつがいの燕が孔明先生の家の門の前の竹竿にとまっていうには、

「先生、先生私たちは南方から帰って参りました。そこはアイニの村でとてもよいところです。」

人々は皆言う、

「あなたは聡明な方ですから一度行ってみると満足できるでしょう。その民族は私知っている限りでは昼夜の別なく働き、一人で三匹の母虎を相手にするほど勇敢です。」

燕は更に言う、

先生がもし行く気があれば以下の事を覚えておいて下さい。

「そこはとても高いところにあります。青煙が藍天までもずっと昇っているところ、そこが村です。泣き声が樹海を破りすべからく犬の声と木を切り家を建てる音が聞こえます。山道の両側では葉の上に露ものれない。険しい道が連なっていて人では到底覚えられない。」

孔明は燕の話聞いてすぐには答えなかった。

二日目の朝、孔明先生はいそいでそばの人に馬と食料を用意させた。そして、服を着替えながら、家のものに家と自分の本の管理を頼んだ。それから、いく代か伝わっている一本の枝をとり真っ白な雄馬にのって町をでた。

十日後、孔先生は一本の大河を捜し当てた。それからその大河に沿って南下すること三ヶ月、うっそうとした大山についた。彼らが入ろうとするとどんな本にも載っていないような密林である。アイニ族がどこにいるのか全く分からない。数人の付いてきたものたちは半信半疑で歩いて行く。腹と眼の中には怒りの色が濃くなってきた。孔先生はそれを見て言う、

「みんなびくびくするな。いつか私たちの足跡を見て気づくものもあるだろう。」

彼らが天のように高い山の頂上に着いた時、たくさんの鳥が見えた。それがギャーギャー鳴きながら前方の山へ飛んで行くのを見て、学識のある孔

先生はきっぱりという、

「諸君、もうすぐアイニ族に会えるぞ。」

その頃は、胡桃の花が咲く季節で野山に喜びが満ちた。そして彼らはだんだんと近づいていっていった。柴を刈る音とともに歌が聞こえる。

犬と雄鳥の鳴く声が聞こえる。更に一歩一歩近づいていくと、斧と山刀の音が聞こえた。それはますます人を奮い立たせた。

「漢人がきた。漢人がきた。」

この大村では村の内外で忙しく働く人を見たが、恐がって一人一人走りかかれてしまった。目下、団結しなければ不利になろう事がすぐに起きた。そのことがわかった孔先生は、急いで馬をとびおり火のような態度で言う。

「親愛なる老郷の人々よ、恐がらないで、恐がらないで。私たちはあなた方をたたいたり、襲ったりしにきたのではない。わざわざ来たのはあなたがたに学びにきたのだ。さあ、一緒に家を建てましょう。」

そして、眼の前の一本の斧を持って他の人の様子を見ながらいくつかの穴を彫った。人々は徐々に接近していった。こうして同じアイニの村で、同じものを食べ、同じところに住み、同じように働き十日が過ぎ、皆がやっと自分の心の中を喋るようになった。ある日孔先生が皆に言う。

「あなた方の建てる家は本当によい。とはいっても、内地の多くの民族は基本的にはみんな私の帽子をまねて作っている。後にはあなた方もそうしてはどうだろうか。おもしろいはなしとして、気に止めておいてもらいたい。それから、私のこの杖は、茶として用いるものである。木になるのに数年かかるがそれがまだ生きていたら、その茶の木は今のところとてもとても少ない珍しいものでその寿命は数百年もある。私はあなた方のこの地の気候が本当に茶を植えるのにあっていると考えている。私は北方の漢人だ。私のはるばるやってきた記念にこの杖を村の泥地に植えなさい。よく保護につとめよく観察して下さい。一年すると、根が生え、芽がでる。これは食べることもでき止血剤としても使える。もしこれが枯れてしまった

ら私をひどい奴だと思ってかまいません。」

先生の話には一点の間違ひもなく、一年たつと杖から根が生え芽がでた。それから、アイニの山には茶があるようになった。

二つ目はこうである。千年前の事、アイニ族がナトラ（貴州）というところへ遷徙してきたときのことである。パイロジュという人が、ある日山に獲物をとりにいって、しとめた一羽のハクカン（鳥の一種）の腹を開いたとき、一粒の漆黒の種を見つけた。当人はそれがよいものか悪いものか知らず、毒があるかも知れないし、宝物であるかも知れないということで家の内外にも言わなかった。そして自分で四十年ずっと持っていた。パイロジュがある日の夜みた夢の中で白髪の老人が言うには

「お前は名のない種を持っているだろう。絶対に捨てたり悪くしたりしてはいけない。それはお前の家の宝だ。」

パイロジュはそれを宝として大事に袋に入れておいた。そしてそれをどうしていいか分からないまま、高齢となった。自分はもう駄目だと思って、子供のジュカンサンにそれを渡した。

「子よ、私は箱の小さな種を一生背負っていた。お前はこれを宝として保持し絶対に渡してはいけない。」

ジュカンサンは父親の言うことをしっかり守ってずっと六十年それを持っていた。シピラ（建水、緑春）というところに来たとき、そこは土地は平たく広いとは言っても気候は合わないで、撒いてはみなかった。ある年、ジュカンサンの病は重くなり自分がもうよくなることを恐れてこの名のない種を家宝として子供のサングイにあたえていうには、

「それはわたしがおまえのおじいさんから伝わった宝だ。お前はこれを永遠にもっておくのだ。」

サングイはその話を聞きとびきり新しい服に袋を作っていておいた。たとえ、サングイの一生が動乱の頃であったにしても、かれが先輩についてジャピラに遷徙してもそれを撒いてみる気はなかった。ずっと背負っていて手で持つことさえな

かった。ネガ（普文）ジェボ、メンルなどにきても彼は撒いてみるつもりはなかった。そして、南糯山にきて十年たつてようやく彼はまいてみた。このころ彼は、既に八十九歳ひとになにもいわなくても——？彼は年をとって動けなかった。それでただ長男のガイチャーにわたした。ガイチャーは父親の話を聞いてそばにとうもろこしを植え、とうもろこしを見に行くという名目でよくこの種を撒いたところに行った。雨期がきてこの名のない種が出芽した。子供が出芽したというので、家のものをよんで一度見に行った。彼は喜んで除草した一年後、かなり大きくなった。内地の漢人がそこを通りかかっているには

「これは茶葉だ。」

「あなたたちのところにはこういった木の茶葉があるのか。これはとても貴重なものだ栽培したほうがいい。」

サングイが亡くなるとき

「私は死ぬが聞くとところによれば茶の寿命はとても長い。数百年後もお前たちは私に会うことが出来る。」

それからサングイが死んでから八百年たち人はその木をサングイ茶樹王（桑婦茶樹王）とよぶようになった。（1989年7月、高和氏談）

新刊紹介

林美容（編）『台湾民間信仰研究書目』

本書目は、台湾中部平原の媽祖信仰圏について最近続々と成果を発表している林美容女士が編集した台湾の民間信仰に関する研究論文と資料の目録である。収録された書目の内容は次の四類に大きく分類されている。一、総類。二、民間信仰（神霊、寺廟、組織、儀礼と活動、曲芸）。三、民間教派（鸞堂、齋教とその他教派性宗教、道教、仏教等）。四、民間俗信（巫術信仰、生命礼俗、歳時習俗）。期刊誌一覧と作者索引があり、工具性を高めている。

中国本土において上海等の地域をはじめとして、民間信仰の研究が盛行しつつある現時点において、既にかなりの蓄積を誇る台湾の民間信仰の研究成果を参照することは、大変重要である。しかし、従来は特定のテーマについて台湾の関係論文や資料を捜すことはなかなか困難であった。本書目の刊行は誠に意義のあることと思われる。

「台湾の民間信仰の分類」と題された序文は、学問は分類より始まると言う通りで、民間信仰

の全体的枠組みを簡潔に提示することに成功しており、この分野に興味を持つ初学者に一読を勧めたい。

本書目は工具書として活用できるだけでなく、台湾の民間の信仰のどのような現実が特に問題視されているのかを如実に示す点で興味深く読むこともできる。例えば、民間教派に「一貫道批判」の項があり、近年解禁された新宗教と既成宗教の間に根強い確執があること、また民間俗信に「大家楽」の項があり、大家楽と称する一種の宝くじが流行する中で、くじの当否を有応公などの低級と見なされる基層的鬼神に問うといった極めて功利的な宗教活動が社会問題化していること、などが読み取れるのである。本書目は、台湾の現代の民間信仰のトータルな容貌を呈示しているとも評し得ると思う。（丸山 宏）

中央研究院台湾史田野研究室資料叢刊之三、
中央研究院民俗学研究所、台北市、

1991年3月刊、197頁。